

令和3（2021）年度 第3学期始業式 式辞

全校生徒諸君、明けましておめでとうございます。

ほんの2週間前の終業式において私は、2学期は皆さんの学びの活動を徐々にはあるけれども着実に従来の形に近づけることができた述べ、今後への期待を示しました。しかるに、特に年明けからのコロナウィルス新規感染者数の推移は、まさに予想を超えるものとなっています。おかしな言い方になりますが、予想を超えてくるだろうということは予想されていたので、重症化リスクが低いとの分析も相まって、私自身が、何か切迫感が足りない状態である感じがして落ち着きません。自身の本音を探ると、もうイヤだ、勘弁してほしい、といった感情が、どうしてもなく根底にあるような気がします。クリスマスの街を歩き交う若者たちや、正月に帰省して久々におじいちゃんおばあちゃんに会うのを楽しみだと語る親子の様子が、繰り返し報道されましたが、我々はそういった日常の何気ない往来を如何に渴望していたことか。ですから、今般のオミクロン株を中心とした感染再拡大の事実は、実に受け入れ難いものではあるのですが、だからといって何かにすがってどうにかなるものではないことも、我々はすでにイヤと言うほど思い知っているわけです。やはり、ここで今一度確認しましょう。この厳しいコロナ禍の社会状況を、“自分ごと”としてしっかり受け止め、これまで行ってきた感染防止策を、ひとり一人徹底いたしましょう。学校生活において、特に気が緩むのはどのような場面であるかを各人がよく考えて、しっかりと意志をもって取り組むことを望みます。他でもないそのことが、皆さん自身の貴重な学びの機会を守ることに繋がると心得てください。

さて、2学期終業式では、宮沢賢治の“自然観”に触れたうえで、世界の現象を人間の価値観で判定するのは思考停止であり危険である、考えることをやめずに“自然”と向き合うことがコロナ禍において求められているのではないかとの私見を述べましたが、このことに関連して、最近、大変興味深いエピソードに出会うことができました。それは、2019年12月に、自らが身を捧げたアフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲医師のことです。彼は、2004年に“宮沢賢治学会”による『イーハトーヴ賞』を受賞しており、さらに、自らを『ゼロ弾きのゴーシュ』の「ゴーシュ」にたとえている、というのです。昨年10月に発行された『わたしは「ゼロ弾きのゴーシュ」～中村哲が本当に伝えたかったこと』（NHK出版）は、NHKの「ラジオ深夜便」に出演してインタビューに答えた中村医師の生のことばを採録した本であり、彼が、心の内なる本音を、そして自らを「ゴーシュ」とする所以を語った、非常に興味深い内容のものです。

ご存じのとおり、中村医師は、山深く、まだ内戦の余波が続き、山賊なども出没する治安の悪い場所で、ハンセン病の診療活動から始め、果ては大規模な用水路の建設を完遂させ、砂漠化した土地に緑を蘇らせたわけですが、その中でまず驚くべきことは、用水路建設の作業員として集まった現地の人々には、元タリバン兵もいれば、反タリバン勢力である北部同盟の元兵士もいる、さらには米軍の傭兵だった人も含まれている、まさに渾然一体の様相を呈していたというのです。私が「驚くべき」と言ったのは、まさに日本から見た視点なのであって、作業に従事した現地の人々からすれば、本来農業を生業としていたのが、砂漠化により飢餓のボーダー上に追いやられたがゆえに、内戦を防ぐことができずに兵士となったのであり、用水路建設作業に汗を流して日当を得られるなら、そしてそれが、自分たちの農業の復活につながるのなら、当然の如く共に働くのだということなのです。むしろ、きちんと通告していたにもかかわらず、発破作業をテロと勘違いして米軍のヘリが機銃掃射を仕掛けてきたことの方が、よほど危険であったと言います。中村医師は、かの地を、「政治では決して色分けできない地域」と呼んでいます。そして、「末永く現地と関わり続けて、本当に現地に役立つ仕事を積み重ねていきたい」という意志を示しながら、「一隅を照らす」という言葉をもって、一つの「現地」を知ることが、世界全体を知ることにつながると説明しているのです。中村医師は、「テレビのチャンネルをパチパチやればいろんなものが観られる」という時代から、かの地に身を投じているわけですが、現在は飛躍的にメディアが発達し、その気になればまさに瞬時に世界中の情報を得ることができる時代に私たちは生きています。その中であって、この「一隅を照らす」という言葉は非常に示唆的だと思います。ともすれば忘れが

ちな、それでも本当に大切な感受性についての手がかりが、ここにあるように感じます。

そして、『セロ弾きのゴーシュ』なのですが、——なかなかうまく演奏できないゴーシュは、指揮者から厳しくそれを追及される。仲間のオーケストラ団員は気の毒そうに見て見ぬふりをする。家に帰ったゴーシュが一人練習していると、夜な夜な猫やカッコウや子グヌキや野ねずみが訪ねてきて、「眠れないから弾いてくれ」とか「具合が悪いからチェロを弾いて直してくれ」とか求めてくる。それでいて、音程が悪いだの、テンポが遅れるだの言うものだから、ゴーシュは腹立ち紛れに無茶苦茶な舞曲を弾いて相手を混乱させたり、「狸汁にして食ってしまうぞ」と言って脅したりする。そんな風に日々を過ごして迎えた演奏会で、ゴーシュの演奏は喝采を浴びる、——といったストーリーですね。ゴーシュは決して人格者ではない、むしろ動物たちを脅したり、意地悪したりしています。でも、窓ガラスにぶつかって逃げようとするカッコウを、自分でガラスを割って逃がしてあげたり、リズムが合わないと指摘する子グヌキのことばには、素直に耳を傾けたりして、結局は夜明けまでそれらの動物たちに付き合っているのです。そのゴーシュになぞらえて、自らのことを「決して自らの信念を貫いたのではありません」と中村医師は言います。そして、はじめは登山や虫への興味から現地に赴き、その状況を見て、自分ができそうなことをすれば何とかできるのではないか、と思ったときに、引き下がる勇気が持てなかったから続いたのだ、と述べています。そして、そのようにして積み上げた年月において、日本では得がたい体験をした、すなわち、一人の人間が生きて死ぬということ、実感をもって感じる事ができ、目が開かれる思いだったと語っています。当然、それは豊かさを感じる経験であり、喜びでもあるわけです。世界を見ることはどういうことか、あるいは世界に向き合うことはどうすることなのかについて、実に雄弁に物語っていると感じ、心を動かされました。

さて、コロナ禍における「世界」ですが、「パンデミックは何か新しい問題を生んだというよりも、元々あった脆弱な社会構造を露呈させた」とユニセフは指摘しています。「石鹸で手を洗おう！」というメッセージを発したときに、世界の人口の実に40%が、手洗いがままならない状態であることがクローズアップされた、というのがその例です。だからといって、一足飛びに、いわゆる「国際協力」に従事しなければならないというような大それたことを言うつもりはありません。まずは身のまわりの「一隅」を照らし、「実感」をもって行動したいものです。

最後になりましたが、6年生諸君、受験本番がいよいよ迫ってきましたね。緊張感が募ってきていることと思いますが、皆さんのこれまで努力を考えれば、緊張するのも道理だと思います。しかし、緊張していたとしても、皆さんには、この駒場東邦で出会った学友たちと切磋琢磨して培った底力があります。この力を持っている以上、一人きりで自室にこもって勉強していても、皆さんは弛みなく最後の最後まで伸び続けます。これは本当です。自分のやってきたことを信じて、力を尽くされることを願っています。

以上をもって本日の式辞とします。

令和4(2022)年 1月8日

駒場東邦中学校・高等学校

校長 小家 一彦